

六花

11
.
12

俳句雑誌りっか
2012 (平成24年)
Cover Dress of Little Bird



山田六甲

高砂の松に生えたる茸かな
 昼顔をたどりてゆかば猫の墓
 背を向けしときに鱸のはねにけり
 音よりも大きく鯉の跳ねにけり
 秋深し砂を歩むにかかとから
 貝の這ふ秋日の中の忘れ潮
 秋風に磯の匂ひのせぬ日なり
 新米のおむすび父と子の浜辺
 枝豆の翡翠指先より生まる
 秋蝶の影の過ぎりし石一つ
 手のひらに秋の蜥蜴の尻尾かな
 冬山を双眼鏡に驚づかみ

薄雲の混沌とあり十三夜
田の縁へりにももの焼いてゐし夜長かな
ちぢ込みて長々とあり穴惑
月夜かな空を二つに分かつ雲
朝寒や雪平鍋に粥の沸き
行く秋の流れに石の残りけり
来いといひ来るなともいふ芒かな
斐ひ伊い川かの八や岐たのを大ち蛇ち穴ち惑
長き夜の貼りては剥がす付箋かな
隠岐はるか鳶の切り取る秋の天
干瓢を因幡の浜の風に干す
小鳥来て阿国の墓に踊りをり

六花 20 周年

自選

私の 10 句

到着順

凍てに耐ふ走り根は地を掴みぬて
丑三つの沖にぎやかにかに烏賊釣火
澄む水に込みあふ鯉のぶつからず
藻の陰に稚魚のかたまる余寒かな
餌を担ぐ蟻に手ぶらの蟻混じる
蜘蛛の囿の糸の無駄も見当らず
木の實独樂回し歳月戻らざる
電灯の紐のわづかな煤払ふ
湧き水の鼓動に揺らぐ花藻かな
料峭や玻璃戸のくもる産児室

佐津のぼる

一山が全山を呼ぶ青嵐
電動車降りて恵方へ杖の音
少年の目に見えて伸び夏休
人呑みし川と思へず曼珠沙華
水害の空白頁古日記
堤防工事今年限りの桜かな
カレンダー発つ日記さず鳥雲に
ひとつの荷ふたりで分けて花峠
ひと鍬ごと風に乾きて春の土
野帰りの郭公の風ふところに

大内 幸子

市川伊團次

若鮎の飛んで届かぬ堰のあり
小雀の危ふく飛んでをりにけり
豆撒きの鬼役外へ星の風
雉子鳴いて父のぬさうな畑かな
七夕や仕事帰りに風のあり
虎杖の皮剥く子供野辺の風
石工の石打つ音や梅雨の中
石囲む十二単の庭となり
パイパイの手にふりかかるさくらかな
掌の花ひとひらを吹き飛ばす

菊谷潔

初時雨かさを出す人走る人
雲白したであひの葉ののびやかに
なき人の小袖几帳にひなかざり
盃蘭盆会やぶ蚊うつ手が合掌す
鶯のうたたさへずる花吹雪
青かへで風のほひの渡るほど
ひとしきり吹雪を見せる桜かな
花に暮つづきは夢に朝寝かな
野分過ぎ野山にはかの気おとろへ
なごり雪風の旅するところまで

江見巖

走り梅雨ちやぼが卵をかかへこむ
昼酒の深まる酔ひ花馬酔木
父の日や名前を入れた酒とどく
裏口に十薬干せし漢方医
まくなぎや出入り少なき鯨幕
あんどんに俳句浮き立ち観月祭
酒蔵の季節限定新酒かな
土器に燈心揺るる風鎮祭
石に顔画いて八朔ひなまつり
須磨寺の首洗ひ池月宿る

北村ちえ子

台風の落とし物なる栗の毬
植替へしかたばみ庭に元氣なり
一族が集いて作る鏡餅
秋立つや野菜炒めの聞こえ来る
竹林の涼しき豆腐いただきぬ
あらめ煮ることから母の盆支度
梅雨の入り金魚二匹買って来し
水しぶくプール開きや子沢山
淡雪や倒木に足とられたる
雨つぶの輪を切り開く鴨一羽

田尻勝子

したたりて神の如くに黒葡萄
ワッシワッシ青天貧る蟬の声
足先に光を掴むあめんぼう
雛の間に光の束のありにけり
ごきぶりの一瞬に死を悟りけり
草刈や野面に甘き風の吹き
たんぼぼの緊張を吹き崩したり
もつそりと手を逃げにけりねこじやらし
春光に歪み真珠のネックレス
いかなごの初引きの垂水かな

小林はじめ

梅が香に誘はれ窓を開けにけり
甌穴の水にたゆたふ蝌蚪の紐
野も山もしづかに梅雨を迎へけり
かなかなのうねり土なりて来たりけり
旅は佳しのどにしみ入る新走
耳すます水琴窟に萩こぼる
大岩を搦めてゐたる蔦紅葉
社会鍋わづかに傾ぎ吊られをり
餅切るや母の仕草のそのままに
天狼星杉の秀にあり若井汲む

五ヶ瀬川流一

立春や水にはじける水の音
声明の満ちて寺苑の梅一樹
囀りや岸を隔てる一軒屋
花冷えや手足の痺る佛かな
夜桜や般若の狂ふ能舞台
白壁に影伝ひ行く日傘かな
竹トンボ我がもの顔に麦の秋
青空に染まることなし夏椿
岸辺なき刻の流れや秋の雲
大根を干して町村合併す

永田万年青

道場の板の眩しき初稽古
寒鯉の鰭を広げて動かざる
百合鷗もだえては羽繕へり
菜の花や沖ゆく船の空に入る
さくらんぼつぶせば指の潰れけり
蜘蛛の囀の真中に蜘蛛の動かざる
信号の柱に隠る酷暑かな
無月かな風を肴に酒を酌む
水澄めり魚の渦巻き進み行く
冬川の底に写りて魚の渦

初曆卒寿迎ふる父ありき
溝渕 弘志
着岸の汽笛響けり黄砂降る
カメラ提げ一期一会櫛紅葉
妻と子の同じ背丈に墓参
屋形船お堀に浮かぶ小春かな
花街に流る三味の音月朧
月の出の鏡の海となりにけり
孫抱いてコスモス畑歩きけり
初雪や口を開いて子が走る
緑陰に誌か集まつて来てをりぬ

終焉の祖母に障子を開けにけり
藤生不二男
遠きほど煌きぬたり冬灯
散る花のあふるる水のごとくなり
水鳥の光巻きあげ発ちにけり
青蜥蜴青をのこして消えにけり
白鷺の胸より歩む青嵐
冬晴や高炉の煙直に立つ
きつぱりと桔梗の花でありにけり
春障子開ければ影の分かれけり
白菊のいのち永きといふものを

摩周湖は藍甕雪に囲まれて
高瀬 博子
修二会見る各人のごと棧掴み
北帰行風待つ鶴が天仰ぐ
サスペンス読む百合の香が邪魔をせり
炎天に躡く映画館を出て
帰省してまづ井戸水で顔洗ふ
月光を巻き込んでゐる大鳴門
銀河濃しトラピスチヌの灯が消えて
減反の田の広広と寒鯉と
濯ぎては水叩きては椿晒す

飽きられてよりで虫の角伸ばす
笹村 政子
ひらめきのごとくに消えし青蜥蜴
み吉野の柿盛る籠の粗目なる
畦みちを歪ませてをり曼殊沙華
霊山や耳遠くなる秋の暮
竹筒に菊いつぼんの髪塚
焚火して紙漉く里の客迎ふ
両膝に水の重みの紙漉女
聴きとれず西行庵の霜しづく
み吉野の葛湯にむせる別れかな

平居濤子

一月や光の嶺のはじまりぬ
大岩をわし掴みして滝凍る
冬波の遠ざかるほど轟きけり
伊吹山仰げる墓地のつくしんぼ
海底に彷徨うごとく梅雨に入る
手を深く差し入れて剪る濃紫陽花
明易や鎖引きずる音のして
渡るたび橋細くなり河鹿笛
姉と訪ふ母校のチャペル涼新た
青空へせり上がり行く稲田かな

松本文一郎

龍の玉運命のごとく掌に転ぶ
咳の砂と化したる蜺桶
うべなへる飛花も落花も音のなし
風鈴や変はりはじめし風の道
五月来る海は光のほかになし
岩礁のしぶきを頬に夏盛る
拾はれてまた鳴く蟬の哀れなり
寒禽の眼は煌煌と北を向く
霏かな行先変へて買ふ切符
山頂の雪を含まば甘露なり

梶浦玲良子

春の田を打つどちらかがエイリアン
たんぽぽの絮や夕日の帰る村
湖に垂る八十八夜の縄梯子
まで貝のうきうきとして掘られたる
夕涼み奈良の大仏売りに出す
かたつむり真つすぐ行けば本籍地
水を打つ匂ひ仏の薄まぶた
落雁のひとつは影か波小舟
しらがねの月をまぢかに村眠る
日の落葉月の落葉と並びけり

出口誠

少年を駆けまはらせて雪積もる
牡蠣鍋を前にし父に戻りけり
花筏鯉の水面を通り過ぐ
風を食ひ風に泳ぐや鯉幟
大夕焼よぎりゆくなり鳥一羽
瀧落ちて草の姿も色も消す
脱ぎ散らし寝たる子にさす後の月
濁流の岸辺に群る々曼珠沙華
大雨のあとのち々ろのさり気なし
冬落暉火の輪となれる観覧車

筒井八重子

初夏にあなたを偲び集ひます
わき水の滴る中を蛍飛ぶ
どくだみの眞白き花が庭覆ふ
鬼灯の葉陰やつと白き花
飛び石の間流れる初夏の雨
はすの葉にかくれし鯉に手を叩く
梅の実が若葉の陰に見えかくれ
庭中が若葉一色風そよぐ
緑道の木々剪定し初夏の風
目に青葉飛行機雲の流れ行く

志方章子

八月の空は健康優良児
涼風の曲り家抜けてきたりけり
いかなごのしなをつくりて零れけり
嬰といふ熱き塊寒の星
母の日や母には悪しき子でありし
蟋蟀のひねりを入れて飛びにけり
黒揚羽ひるがへるとき翠なす
壬生狂言人につられて笑ひけり
滝音に閉ぢ込められてをりにけり
ルノアールの少女のやうなチューリップ

赤松有馬守破天童正義

還暦の遊人暮し冬至風呂
寒月や母の祥月命日か
すす逃げや八畳一間丸く掃く
忌中の字貼られし家の梅開く
てつぺんに雨粒のせたる土筆かな
雨音を樂しんでをり春の雨
春の雨起きてはみたが又寢床
萍や逢瀬樂しむ鯉がをり
鯛には炙りのあとがひいふうみ
約定の白き紙捨て暑氣拂ひ

雪 卿 集

秋

永田万年青

秋扇少し開いてまた閉ぢぬ
秋高し巖となりしさざれ石
潮騒に勝りてをりぬ秋の虫
潮風の懐に入る秋の宿
灯台の光濃くなり虫集く

五合目

松本文一郎

バス降りて意気軒昂の登山口
岩棚へ着地せる音涼しかり
五合目の水場に遊ぶ日雀かな
秋波の湖岸へ寄せてまた寄せて
微動せる飾り提灯盆太鼓

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

山 繭

市川伊團次

大山の雲を煽げる秋扇
賑やかや芒の叩く風の音
静かなるリフトの下の猫じやらし
露天風呂背中を流す虫の声
山繭の抜け殻となり草の上

栗 鼠

田尻勝子

かまきりの尻尾をたててをりにけり
赤とんぼおそれ入りたる杭の上
もののけの戸板に当たる夜寒かな
階段にポインセチアの一つつつ
栗鼠の尾の渡り終へたる紅葉かな

蛩雪譚 六甲

十二月号選後に

秋扇少し開いてまた閉ぢぬ

永田万年青

秋扇らしい使い方。夏場の扇ならば開くとすぐさま使うが、秋の扇は、どこか躊躇した使い方をする。そこを木訥に表現。これが秋扇でなかつたら、ただ事俳句である。このような無作（むさ・技巧を凝らさない）で真正直な俳句は万年青さん独特の骨太い作り方。

秋高し巖となりしざざれ石

出雲大社での作品。国歌「君が代」の歌詞に出てくる「ざざれ石の巖となりて」の巖が出雲大社に据えられている。このざざれ石は、岐阜県揖斐川町春日から寄贈されたもの。ざざれ石は、明治記念館・道明寺天満宮、岐阜県指定天然記念物・三重県水屋神社・京都下鴨神社・美濃市・鎌倉鶴岡八幡宮・伊勢二見が浦・長府乃木神社・京都吉田山吉田神社などがあり、君が代の元になった古今集の藤原石位左右衛門の「和歌」でうたわれているのは岐阜県のざざれ石という。秋晴れの大社でざざれ石に国歌斉唱の気持ちで見入っているのだ。

漸騒に勝りてゐたる秋の虫

言われてみれば潮騒よりも虫の音のほうが勝っている。海岸に立って夜の海を眺めていると足許の岩に寄せる波音よりはるかに虫の集いて鳴く声の方が大きいと感じいたの

だ。それはそれで秋の夜長の雰囲気を盛り上げてくれる。アレマツムシガナイテマスネエ、タケオサン。ソ、ソウデスネエ、ナ、ナナミコサンツ！…。尾崎紅葉の臨終の話。山田風太郎先生が書いているが引用していたら話が長くなるから割愛する。(以下略)

六花集

古秋花秋白
池の木暑鷺
や日権しの
野や障裸餌
猫白ので捕
現壁影駆る
る眩がく頸
野し揺るの
路天るど早
の守なもか
秋閣り達り

吉田優美子

謎八送門朝
多月り柱顔
き尽火にの
石満い朝と
棺月つま顔一
にのでもの日
し二度も手種置
て巡振りき
露しりに忘
と来けり
どてりるり

平居濤子

河新仕夕た
川涼舞涼お
工やふしや
事おも猫か
花ク一のな
野ス一寄風
をり針り手
透手かけ合折
か帳てふり
す帳秋外て
測新秋階初
量し灯階初
士く下段芒

大内幸子